

長崎と隠元

～黄檗文化の広がり～



ミュージアム県
ながさき

10 History and Culture of Nagasaki
2021 Spring

長崎の東明山興福寺の住持逸然は、当時の日本仏教界の荒廃を憂っていました。逸然の会下*にあった無心性覚の懇請もあり、黙子や唐通事、有力な檀越（寺の支援者）らと協議して、隠元を招請することになります。

承応元年（1652）4月、最初の招請状を送りましたが、隠元は高齢のためとして辞退しました。2度目の招請の時、逸然は手紙に路費百金、香帛*8種を添えて発送しましたが、途中海賊に奪われて隠元には届きませんでした。しかし、逸然らはあきらめることなく、翌年11月までにさらに2度招請状を送ります。

隠元は、最初は辞退したものの、その熱意に応じて日本へ渡ることを決心します。中国で強く引きとめられましたが、3年たてば帰国する約束で日本へ渡ることとなりました。



▲最初の招請に対して辞退する内容の隠元からの返書／「第一請啓復書」順治9年(1652) 京都 萬福寺蔵

*会下：師僧の門下に集まって修行する所
*香帛：お香、蠟燭、紙などの儀式用品

三顧の礼に答えて来日したんだよ。長崎に住む中国人たちが頑張ったおかげで、隠元さんにいらしてもらえたんだね。



隠元の来日
「すごい僧が長崎にやってきた！」

徳の高い名僧という隠元の名声はすでに日本にも届いており、その隠元が来日するといううわさは、長崎以外の地にも早くから伝わっていました。隠元渡来を待ち望む人々の中には、了翁道覚のように、隠元渡来の2年も前に江戸を発って長崎に向かう人がいたほどでした。



▲「黄檗山国師来朝到岸之図」禅統紹 19世紀 法田寺蔵

承応3年（1654）6月21日、隠元を乗せた船は廈門を出帆。同年7月5日、長崎に入港します。そして翌日、隠元は逸然らに迎えられ興福寺に晋山*しました。

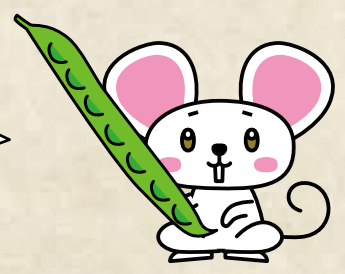
来日した隠元のもとには昼夜を問わず、僧俗男女が入替わり立ち代り訪れ、特に臨済宗妙心寺派の僧衆は老僧、若僧、紫衣（高位の僧）も黒衣（修行僧）も200人ほど集まったといわれています。隠元の人気ぶりはその後も続き、寛文7年（1667）に奈良を訪れた際には、隠元が訪問する所に、どこも千人ぐらいの人がついて歩いたと記されています。

このような隠元ブームとともに、黄檗ブームも巻き起こりました。隠元とともに来日したのは30名ほどでしたが、黄檗僧の他に職人などもあり、黄檗文化と呼ばれる明末清初の中国文化が直接日本にもたらされ注目を集めるきっかけとなりました。人々は、まるで五感で吸収するかのように黄檗文化に触れ、熱狂的に支持し、黄檗ブームは長崎から日本全体に広がっていきました。

*晋山：住職として赴くこと

1 隠元とは — 隠元の魅力と功績 —

ボクは、隠元さんに可愛がってもらっている白鼠だよ。みんなは、ボクのことを大黒天の使いだって噂してるんだ。たくさんの方がボクを見に萬福寺にやってくるんだけど、ボク以上に人気があるのが隠元さんなんだ。隠元さんは、黄檗ブームの火付け役。これからボクが隠元さんを紹介するね！



隠元隆琦 (1592~1673)



▲「隠元騎獅像（部分）」喜多道矩筆・隠元隆琦賛 長崎歴史文化博物館蔵

中国福建省福清生まれ。俗名は林曾炳。28才の時、黄檗山萬福寺で仏門に入りました。その後、名僧と知識を求め各地で修行。天啓6年（1626）、金粟寺で悟りを開き、崇禎10年（1637）に萬福寺の住持*となります。その後、福嚴寺、龍泉寺の住持を歴任し、再び萬福寺の住持となりました。衰退していた寺院の経営を立て直し、門人の育成に努め、指導者としても尊敬を集めました。

中国仏教界で大きな勢力を誇った禅宗のなかでも特に臨済義玄以後の正統の教えを受け継ぎ、修行に厳しい人でした。しかし人柄は非常に温厚で心優しく、人々から厚い人望を集めた名僧でした。高僧としての隠元の名声は、語録などの出版物を通して、遠く日本にまで伝わっていました。

長崎興福寺の住持逸然らの4度に渡る招請を受け、63歳という高齢で来日。長崎の興福寺、崇福寺の住持を勤めます。臨済宗普門寺の住持龍溪らの働きかけで摂津の普門寺へ移り、万治元年（1658）、4代将軍徳川家綱に面会。その後日本に留まり、黄檗山萬福寺を開創。臨済宗黄檗派（後に黄檗宗）の開祖となりました。寛文13年（1673）示寂*。

*住持：禅宗寺院の住職のこと *示寂：高僧の死

画像の隠元さんは、偉いお坊さんなのに威圧感がなくて、目が笑っているよね。修行の場以外では、温和で優しい人なんだよ。



*主なできごとをまとめた年表は24ページにあります。

隠元は出家前、売られている生き物を見ると必ず買い取って放したり、住持となった萬福寺では昼時になると自分で買った米を鳩に施すなど、生き物に深い愛情を有し、放生を勧め殺生を戒める詩偈*を多く残しました。また、出家し修行を積んで高位の僧になっても、先師の苦勞を語る時にむせび泣き、師翁*密雲の塔を掃い感極まって涙する一方、花や風景に感動して詩偈を残すなど感受性豊かな一面も持っていました。そして、訪ねてくる者にはいつも分け隔てなく接したといいます。人間隠元は、本当に愛情深く心豊かな魅力的な人だったようです。

ところで中国において高名な禅僧であった隠元は、来日する前からすでに日本で有名であり、釈迦・達磨の再来と言われるほどでした。その隠元の日本における主な功績を見てみましょう。

江戸時代はじめ、日本の仏教界は幕藩体制*の枠の中に閉じ込められ、活動の自由が無く、閉塞感が強まっていました。そこに隠元によって中国の正式な禅宗のスタイルがもたらされ、日本仏教に革新的な変化をもたらすこととなります。例えば、奈良時代の鑑真が日本に伝えて以来、長らく途絶えていた仏教で最も重要な儀式の三壇戒会を再興し、あわせて、三壇戒会の順序や方法を詳細に記した『弘戒法儀』も刊行したことで、正式な授戒を日本でも可能にしました。

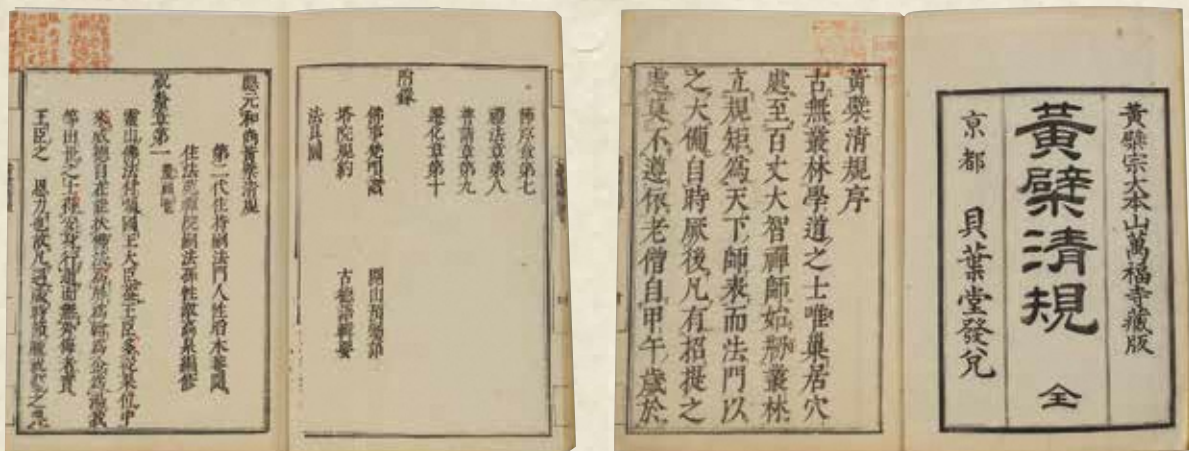
また、隠元によって導入された『黄檗清規』によって、中国の禅宗寺院と同様に規律正しい寺院運営と修行がおこなわれるようになりました。

隠元は、日本の宗教界に新たな風を吹き込み、規律を立て直ただけでなく、明末清初(17世紀)の中国文化、いわゆる黄檗文化をもたらしました。黄檗文化については後で詳しく触れますが、単に長崎だけでなく、日本で全国的に中国文化が受け入れられるきっかけとなり刺激となりました。そして、江戸時代の日本において幅広い分野で新しい文化を生み出す原動力となりました。

※偈：韻文の形で、仏徳を讃嘆し教理を述べたもの。頌文(じゆもん)。偈頌(げじゆ)

※師翁：師の師

※幕藩体制：将軍と大名(幕府と藩)が土地と人民を統治する支配体制



▲『黄檗清規』 江戸時代 京都 萬福寺蔵



隠元さんは、誰にでも優しくてひょうきんな人なんだけど、仏教のことになるとすごく真面目で厳しいんだよ。

隠元さんとゆかりの深い人たちを紹介するよ。



龍溪性潜 (1602~1670)



▲[大宗正統禅師 龍溪大和尚頂相] 萬松院什物

元和3年(1617)16歳の時、叔父の勧めで摂津の慈雲山普門寺に入り出家。その後、普門寺、龍安寺塔頭皐東庵、妙心寺などの住持を歴任し、紫衣を賜りました。隠元が渡来すると、長崎の禅林寺に滞在していた竺印から妙心寺へ招聘することを呼びかけられ、禿翁とともに隠元招請の積極的な支持者となりました。その計画はかないませんでした。隠元を普門寺に招請し、日本に留めるために奔走します。万治元年(1658)、隠元が江戸城で徳川家綱に面会する際には、禿翁と共に同伴しました。また、後水尾法皇と龍溪の交流は深く、法皇は龍溪の黄檗禅における唯一の法嗣*でした。寛文9年(1669)、龍溪は隠元の最初の日本人法嗣となりましたが、翌年、大坂九島院を洪水が襲った際に、弟子たちの避難の勧めに応じず禅堂に座ったまま示寂しました。

※法嗣：師匠の教えを受け継ぐあととり。

徳川家綱 (1641~1680)

徳川幕府第4代将軍。万治元年(1658)9月19日、江戸に到着し天沢寺に滞在していた隠元に、老中松平信綱と寺社奉行井上正利をつかわして慰勞しました。同年11月1日、江戸城にて隠元と面会。隠元は、線香百本・唐墨16挺などを献じ、同行していた龍溪は『黄檗和尚華語録』6冊・『隠元扶桑語録』5冊・唐扇2本、禿翁は杉原(和紙)一束を家綱に献じました。家綱は隠元へ、衣と金を下賜しました。その後、家綱は隠元に帰依します。寺地や造営費、資材を支援し、宇治大和田の地に黄檗山萬福寺が創建・整備されました。



▲[徳川家綱像] 奈良 長谷寺蔵

後水尾法皇 (1596~1680)



▲[後水尾天皇像] 御寺泉涌寺蔵



▲後水尾法皇から贈られた舍利塔「金銅舍利塔」宮嶋半四郎次作 寛文6年(1666) 京都 萬福寺蔵

後水尾天皇。在位18年。母は女御中和門院藤原前子(関白近衛前久の三女)。黄檗山の寺地は、もと近衛家領で中和門院の御殿があった場所です。

慶安4年(1651)5月6日、相国寺慈照院で仏門に入り、多くの禅僧に帰依しました。寛文3年(1663)、龍溪に隠元の禅要を問い、翌年、隠元に香木を贈り交流が始まりました。寛文6年(1666)6月29日、隠元に仏舎利5顆と舍利塔を贈り、これに対して隠元は高泉に命じ『黄檗山特賜仏舎利記』をつくらせました。隠元が示寂する前日には「大光普照国師」の号を贈るなど、隠元に深く帰依していました。

さかいただかつ
酒井忠勝 (1587~1662)

川越城主、若狭小浜城主。徳川家綱時代の中老・大老。牛込下屋敷に沢庵宗彭の命名による延命山長安寺を建立。正保2年(1645)、徳川家綱元服^{げんぶく}の総奉行を担当しました。隠元の帰国の意思を知った龍溪らの滞留運動に対し、幕閣の中心にあって終始積極的な姿勢をとりました。万治元年(1658)隠元が江戸に下った際、父忠利の三十三回忌の予修を請い、隠元は唐和僧十数人を伴って長安寺に赴きました。翌年、隠元へ日本での滞留を勧める書状を贈り、隠元は日本に留まることを決意しました。

※元服：男子が成人になったことを示す儀式

「酒井忠勝像」小浜市教育委員会提供▶



あおきしげかね
青木重兼 (1606~1682)



▲「青木重兼像」沸日寺蔵 (画像提供：豊中市教育委員会)

摂津麻田城主。明暦2年(1656)、普門寺の隠元に帰依しました。万治2年(1659)、沸日寺を造営。隠元を招き額字を請いました。翌年、中殿を落成して隠元を開山第一代とし、隠元より「二木」の法号を得ます。寛文元年には、隠元を招いて7日間の小参^{せさん}をおこないました。寛文7年(1667)、家綱から萬福寺に銀2万両と西域木(チーク材)の寄進があり、大雄宝殿を建立する際の造営奉行を勤めます。このとき、黄檗山内に不二庵を建立。留雲亭を構えて住みました。寛文13年(1673)、隠元示寂の日、弟と共に松隠堂に見舞いました。延宝7年(1679)所領の三田に方広寺を創建し、木庵を開山としました。

※小参：臨時に住持が方丈で修行僧に説法すること。

いなばまさのり
稲葉正則 (1623~1696)

相模小田原城主。延宝8年(1680)まで老中。4歳で母を失い、祖母の春日局に養われました。龍溪らの隠元日本滞留周旋に、幕閣として酒井忠勝、忠清、松平信綱らと共に対応。黄檗の外護者となりました。隠元が江戸へ下った際には、養源寺に招き、釈迦如来像の安座を請い、法語を贈られました。また、宿舎の天沢山麟祥院に隠元を訪ねるなど、隠元との交流を深めました。他に、木庵や鉄牛、南源、高泉、悦山などの黄檗僧とも交流がありました。

「稲葉正則像」喜多元規 弘福寺蔵 (画像提供：墨田区教育委員会)▶



ながいなおまさ
永井尚政 (1587~1668)

山城淀城主。江戸城天守・西の丸山里数奇屋の普請奉行や禁裏造営奉行、惣奉行、増上寺台徳院法会奉行を歴任。慶安元年、宝林山興聖寺を造営し、万治2年(1659)、隠元を宇治に招き興聖寺に宿泊させました。また、隠元ら黄檗僧を別荘に招き、隠元からは「緑磁観音像」が贈られました。この像は、現在も隠元の賛とともに興聖寺に伝わっています。寛文8年(1668)没。隠元は木庵と共に挽偈を贈っています。

◀「永井尚政像」興聖寺蔵

2 隠元と長崎



隠元さんがこられる前の長崎は、どんな様子だったのかな。

長崎の発展に 貢献した唐人たち

長崎では、隠元が渡来する前から多くの唐人が来日し、定住する者もありました。彼らの中には、石橋架設の技術指導や資金の提供をおこなったり、在来の寺社へ寄進する者がいました。また、長崎の地役人として町の運営に協力する者、医者や儒者といった専門的な知識や技術を伝える者もいました。

また、唐人によって整備された唐寺は、同郷出身者の集会所として機能しましたが、日本人との交流の場としての役割も担うことになりました。

このように、長崎の町づくりへの参加などを通して、唐人と長崎の人々との関わりは密になっていきました。交流拠点となる唐寺も整備されたことで、隠元の渡来以前には、長崎における中国文化の受け入れ基盤がすでに整えられていたのです。



▲興福寺2代住持黙子如定の指導で建設されたためがね橋

長崎に隠元さんがいらした頃にゆかりのあった人たちを紹介するよ。



いつねんしょうゆう
逸然性融 (1601~1668)



▲「逸然禅師画像」浦川菊市筆 長崎歴史文化博物館蔵

興福寺第3代住持。隠元の招請に尽力し、隠元を興福寺の住持として迎えると、自らは監事となりました。隠元が普門寺へ赴く際、梅谷を随行させ、自らは遅れて上り、翌年長崎に帰りました。絵を得意とし、明末華南の画風を伝え、多くの日本人が絵を学びました。その中で特に渡辺秀石と河村若芝を育て、長崎画壇の基礎を作りました。



▲「達磨図」逸然性融筆 道者超元賛 長崎歴史文化博物館蔵

長崎における 隠元ゆかりの人々

くろかわまさなお
黒川正直 (1602~1680)



▲黒川正直が寄進した萬福寺の鐘楼 (画像提供: 京都萬福寺)

旗本。慶安3年(1650)11月長崎奉行に就任し、翌年6月長崎に着任。逸然らの隠元招請に関わります。承応3年(1654)7月6日、興福寺に晋山した隠元に、同役かいのしょうまさのぶ甲斐庄正述と共に謁見し、偈を贈られました。隠元へ普門寺招請に応じることを勧め、餞別の齋*を設けました。寛文2年(1662)冬、非番で江戸へ向かう途中、新建の萬福寺に隠元を訪ね、送別の示偈を受けました。寛文5年3月、長崎奉行を退任し大目付となり、同8年、萬福寺に鐘楼を寄進。隠元から檀護だんごに対し感謝されました。延宝8年(1680)5月2日79歳で没。宇治の黄檗山万松岡に葬られています。 ※齋: 仏事の時の食事。

なべしまかつしげ
鍋島勝茂 (1580~1657)

佐賀藩主。寛永15年(1638)島原・天草の乱に出陣。同19年から長崎警備にあたります。隠元に最も早く関わった大名の一人で、承応3年(1654)冬、隠元に五色の法衣を贈り、隠元より返書を受け取りました。明暦元年(1655)、隠元が普門寺へ向かう際には、領内での警護に当たり、諫早江を渡る船を用意しました。大名として最も早い黄檗げこしゃの外護者*で、領内には黄檗寺院が多く整備されました。 ※外護者: 宗教・寺院などを特別に保護すること。

「鍋島勝茂像」 公益財団法人鍋島報効会所蔵▶



すえつくへいぞう
3代末次平蔵 (?~1654~1669)



▲「清水寺末次船絵馬下絵」長崎歴史文化博物館蔵

長崎代官、朱印船貿易商。3代末次平蔵は、隠元の渡来を迎え檀護となります。隠元ほか、法子大眉ほうしだいびしやうぜん性善、独吼どっくしやうし性獅らを末次園に招きました。隠元から「昨非」の法号を得ました。

4代末次平蔵は、隠元80歳の賀を兼ねて登樂とうばくする千呆せんがい*に母と共に同行。隠元から母と共に示偈を与えられました。密貿易が発覚し闕所*となったのは、延宝4年(1676)のことでした。

※闕所: 全財産を没収されること。

※千呆: 渡来僧。崇福寺の中興第2代住持で、後に萬福寺第6代住持となる。

末次平蔵宅跡の碑 (現・桜町小学校) ▶



がこうざい
何高材 (1596~1671)

唐通事*。福建省福州府福清の出身。崇福寺開創期の檀越として、その整備に尽力し、大雄宝殿の建造や梵鐘の鑄造などを支援しました。承応元年(1652)4月、逸然の第一回隠元招請書とともに送られた檀越の請啓(招請書)に名を連ねました。隠元の渡来当初より交流があり、承応3年(1654)夏、隠元より性崇の法名を授かります。そして翌年、『隠元禅師語録』『同統録』を出版しました。隠元の崇福寺晋山にも尽力し、その功に報いるために聖寿山の額を書き与えられました。寛文4年(1664)夏、宇治の萬福寺を訪れた際には、隠元をはじめとする唐僧が詩偈を贈って歓待しました。

※唐通事: 長崎奉行の配下に置かれ、通訳兼外交官的役割を担い中国との貿易交渉にあたった役職

▶崇福寺大雄宝殿額。額の左に何高材の名が見える。



▲崇福寺第一峰門

さかきにざえもん
彭城仁左衛門 (1633~1695)

唐通事。中国名劉宣義りゅうせんぎ法名道宣。明暦元年(1655)23歳の時、隠元の普門寺行きかつしやういんの通事として百余人の中から長崎奉行によって選ばれます。寛文元年(1661)、勝性印、独健性乾と共に萬福寺に西域木(チーク材)を寄進。同9年(1669)と12年(1672)に登樂し、隠元や木庵を訪ねました。博学で詩文の才能が高く、林道栄と並び称されました。隠元から贈られた法語・鞆ぼんげ偈、謝偈が残されています。延宝年間(1673-1681)に唐大通事最上席、元禄5年(1692)に唐年行司となりました。同8年、63歳で没。崇福寺に葬られています。

▶光永寺(長崎市桶屋町) 寛文の大火(1663)で焼失したが、彭城仁左衛門らに留唐人や檀徒によって再建された



▲「劉大基給像(彭城仁左衛門給像)」 画者不詳 長崎歴史文化博物館蔵

はやしどうえい
林道栄 (1640~1708)



▲「林道栄像」画者不詳 長崎歴史文化博物館蔵

林家最初の唐通事。唐年行司を勤め隠元をはじめとする黄檗高僧へ参禅さんぜん*した林公琰はやしこうえんの長男。道栄は、語学のみならず詩や書に優れ、その学才で高名でした。隠元に非常にかわいがられたことが知られています。彭城仁左衛門と林道栄は、共に長崎奉行牛込忠左衛門うしごめちゆうざえもんから殊遇を受けました。忠左衛門は、杜甫の漢詩の首句「東閣官梅動詩興」から彭城に東閣、林に官梅の号を授けています。

※参禅: 禅の道に入って修行すること。



▶七言詩「纓婦龍尾云々」林道栄筆 長崎歴史文化博物館蔵

長崎・唐寺めぐり

長崎に明(中国)の商人らが多数来航する中(*1635年に唐船の来航は長崎に限られました。)、唐船に積まれた航海の安全を守る「媽姐(菩薩)」を長崎滞在期間中に安置する祀堂が必要となり、同郷団体である「幫」ごとに興福寺(南京、1620年創建)、福濟寺(泉州・漳州、1628年創建)、崇福寺(福州、1629年創建)の「唐三ヶ寺／三福寺」が建立されていきました。それは、キリスト教禁教下において、商人らが仏教を信仰していることを証明するための行為でもありました。これらの寺院は、1654年(承応3)の隠元禅師の来日により、禅宗寺院(黄檗宗)としての趣きが濃くなり、のちの1677年(延宝5)には、宇治の萬福寺で修行した禅僧によって聖福寺も建立され「四福寺」と称されるようになります。

中国の意匠が随所に見られる建造物や仏像など、一步入山すると、長崎に居ながらにして、たちまち中国の造形美の世界に包まれていきます。当時の日本人が最新の中国文化を驚きをもって眺めたであろう姿が想像されます。

東明山興福寺——「初登宝地」

興福寺(県史跡)は、1620年(元和6)に唐僧・眞圓が小庵を作ったことにはじまると伝えられます。隠元禅師が1654年(承応3)に来日後はじめて入山した寺院であり、隠元禅師を招聘したのも同寺の三代住持の逸然性融でした。二代の黙子如定は、石橋「眼鏡橋」(重要文化財)を架けたことでも知られています。

1663年(寛文3)の市中の大火で焼失したものの再建され、中国の工匠による本堂・「大雄宝殿」(1689・1883年再建、国重要文化財)や、同堂内の瑠璃燈(市有形文化財)、「あか寺」と称される所以となった山門(1690年、県有形文化財)、媽姐堂(県有形文化財)、鐘鼓楼(1691年、県有形文化財)、唐僧墓地(市史跡)など黄檗文化を象徴する文化財であふれています。

- 拝観時間: 7:00~17:00 *年中無休
- 拝観料: 一般300(240)円、中高生200(160)円、小学生100(80)円 ()内は団体料金
- 住所: 〒850-0872 長崎県長崎市寺町4番32号
- TEL: 095-822-1076



▶ 逸然筆、即非贊
 「白衣大士觀瀑図」1665年
 (長崎歴史文化博物館蔵)
 長崎における漢画の祖・興福寺三代住持・逸然による



聖寿山崇福寺——今もなお全国から華僑が集う

福州地方の商人を檀越とする唐寺で、1629年(寛永6)僧・超然が招聘され、1635年(寛永12)に殿堂が建立されたと伝えられます。はじめ唐船に乗せられた「媽姐」を安置し、航海の安全を願う儀式等が行われていたといえます。隠元は、1654年(承応3)に興福寺に入山の後、翌年には崇福寺にも入りました。1657年(明暦3)には隠元の高弟・即非如一が渡来し、崇福寺の住持となり、中興開山の祖とされました。

長崎市内に現存する最古の建物で、釈迦三尊と奇怪な表情を浮かべた十八羅漢像(県有形文化財)が安置される大雄宝殿(1646年頃、国宝)や第一峯門(唐門)(国宝)は、いずれも中国で準備された建築部材が持ち込まれて建造された中国様式のものであります。また、竜宮城を連想させる三門(楼門)や鐘鼓楼・護法堂(全て重要文化財)など中国と日本の建築様式が融合した建造物もあります。毎年夏には、全国から華僑の皆さんが集い、先祖供養のための盂蘭盆会が行われます。

- 拝観時間: 8:00~17:00 *年中無休
- 拝観料: 大人300円、高校生200円、小・中学生無料
- 住所: 〒850-0831 長崎県長崎市鍛冶屋町7-5
- TEL: 095-823-2645

▶ 釈迦三尊像と十八羅漢



分紫山福濟寺——往時の壮大な伽藍を想う

中国の建築様式で建てられた壮大な寺院で、1927年(昭和2)には国宝に指定されました。1628年(寛永5)に泉州から渡来した覺海が小庵を建てて媽姐を祀ったのが始まりと伝えられます。隠元来日の翌年に隠元の高弟で書をよくした木庵性瑯が渡来して、ここに入山しました。はじめ泉州寺、のちには漳州出身の潁川家が大檀越となったこと等から漳州寺と称されるようになり、長崎の唐寺で最大の伽藍を誇りました。泉州出身の第7代住持の大鵬は墨画を善くしたことで知られています。また、幕末には、勝海舟と坂本龍馬も逗留したと伝えられています。

布袋像や沈南蘋筆「牡丹の戸襖」などが人々に愛されていましたが、1945年(昭和20)に原爆により焼失しました。現在は原爆被災者や戦没者を慰霊する「萬国靈廟長崎観音」が建立されました。

- 拝観時間: 8:00~17:00
- 住所: 〒850-0052 長崎市筑後町2番56号
- TEL: 095-823-2663

▶ 「大日本肥前国長崎山下筑後町黄檗宗特別保護建造物 分紫山福濟禅寺境内略図」修翠館版1923年頃(長崎歴史文化博物館蔵)



万寿山聖福寺——奇矯な笑みの布袋様

興福寺、崇福寺、福濟寺の「三福寺」とあわせ、「四福寺」と称されています。木庵の弟子で、長崎生まれの禅僧・鉄心道胖のために、1677年(延宝5)に長崎奉行や在留唐人らによって創建されました。黄檗宗寺院特有の伽藍配置を継承した建造物は、鉄心が修行した萬福寺に倣った建築様式で、桃の装飾が目を引く大雄宝殿(1715年改修)や、布袋が福々しい笑みで迎えてくれる天王殿(1705年)、山門(1703年)、鐘楼(1716年頃)が建てられています。これら4棟は2014年(平成26)に重要文化財に指定されました。また媽姐堂が設けられなかったのも特徴としてあげられるでしょう。幕末には、海援隊の「いろは丸」と紀州藩船との衝突事故の賠償交渉が行われた場となったことでも知られています。

- 住所: 〒850-0053 長崎県長崎市玉園町3番77号
- TEL: 095-823-0282

弥勒菩薩の化身とされる布袋▶



「滝の観音」長瀧山靈源院——長崎の小秘境

1659年(万治2) 広東の商人・許登授が航行中に嵐に会ったものの、九死に一生を得たことから、古より霊場として知られていた「瀧の観音」を信仰し、1669年(寛文9)に同地に観音堂を建立して、広東から具奉した魚籃観音菩薩を本尊としました。もとより1660年(万治3)に奥の院に、木庵の弟子鉄巖が小庵を設けていたことから、観音堂建立にともない鉄巖が請われて黄檗宗寺院として開山されました。領主・諫早家の祈願寺であったことでも知られています。木立に包まれた静寂の中に、苔むした石仏や渓谷沿いの磨崖羅漢、石橋などが佇み、ここちよい滝の清韻が日常の喧騒をしばし忘れさせてくれます。長崎の県指定名勝の第一号。

- 拝観料: 大人200円、小人100円
- 住所: 〒851-0136 長崎市平間町1646番地 靈源院境内
- TEL: 095-838-3701

▶ 瀧の観音全景
 (「長崎古今集覧名勝図絵」長崎歴史文化博物館蔵)



3 黄檗文化は江戸時代の華



江戸時代初期に伝わった黄檗文化は、日本文化にインパクトを与え、
いろいろな文化の花を咲かせたんだよ。

黄檗文化とは

黄檗文化とは、黄檗宗の宗祖隠元の渡来以降、中国からもたらされた明末清初の諸文化のこと。

江戸時代の日本へ与えた影響は幅広く、建築、文学、音楽、書道、絵画、彫刻、印刷、医学といった学術や文化の面だけでなく、衣食住といった生活に密接した分野にまで及び、江戸期の日本文化を大きく発達させました。それらは現代の私たちの身のまわりに溶け込み、今なお日本文化の中に息づいています。

食文化

食材

隠元の名を冠したインゲン豆は、今では和食の食材として欠かせない存在です。このインゲン豆やスイカ、レンコン、もやしなどは、隠元によってもたらされたと言われています。

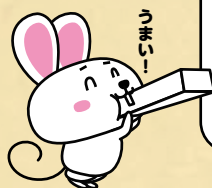


インゲン豆



寒天

寒天は、「寒晒しのところてん」という意味で、
隠元さんが名づけ親なんだよ。



食卓

江戸期の日本では、食事をする時、一人用の膳を用いていました。ところが、中国から黄檗の普茶料理とともに食卓(テーブル)がもたらされ、皆で一緒に食卓を囲んで食事をする新しい食事形式が始まりました。



▲食卓を囲む大田南畝ら。『料理通』より抜粋
(人間文化研究機構国文学研究資料館蔵 CC BY-SA)

煎茶

茶は、臨済宗の開祖栄西が1191年に中国から長崎の平戸にもたらし、日本に広がりました。しかしそれらは、磚茶や挽茶と呼ばれる茶葉を粉末にし、湯に溶かして飲む方法で、主に権力者や有力者など限られた人々のものでした。

一方、茶葉を湯に浸してそのエキスを飲む煎茶は、隠元らによってもたらされました。禅僧の間だけでなく町中の茶屋などを通して庶民の間にも普及し、煎茶道や菓子の発達も促しました。また、売茶翁として知られる江戸中期の黄檗僧月海は、京都の各所で茶を供し、多くの文人とも交流することで、煎茶の定着に大きな役割を果たしました。



▲『料理通』より抜粋
(人間文化研究機構国文学研究資料館蔵 CC BY-SA)



▲「かぎやおせん」(北尾重政筆、東京国立博物館蔵 Image TNM Image Archives)
「お仙」は水茶屋「鍵屋」の看板娘としてもてはやされ、その人気は狂言や歌舞伎がつくれるほど。

普茶料理

普茶料理とは、中国の料理形式の一つで、隠元をはじめとする黄檗僧らによって伝えられました。肉や魚など動物性のたんぱく質を使用しない中国風の精進料理です。油を多用するのが特徴で、その調理法は極めて洗練されています。卓袱料理のルーツの一つでもあります。

黄檗僧が長崎から畿内そして江戸などへ進出するのにあわせて、普茶料理も各地に伝播していきました。やがて普茶料理は、黄檗の寺院料理としてだけでなく市中の料理屋でも提供され人気を呼びました。



▲「江戸時代の普茶料理の様子。『料理通』より抜粋
(人間文化研究機構国文学研究資料館蔵 CC BY-SA)



▲普茶料理 (聖福寺)

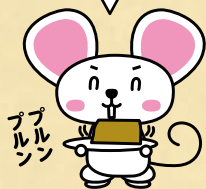


▲普茶料理 (萬福寺)



胡麻豆腐

胡麻豆腐は、
普茶料理のメニューの
一つだったんだよ。



▲普茶料理 (興福寺)

卓袱料理

卓袱料理は、テーブルを囲んで食する新しい料理形式で、日本・西洋・中国の献立が混在したものです。18世紀には卓袱料理について記された本が多数発行され、19世紀初頃には地方の村人にも知られるほど広く普及していました。

江戸の高級料理屋八百膳の主人栗山善四郎は、『江戸流行料理通』の「第4編 卓袱料理・普茶料理」を執筆するため、卓袱料理を学びに長崎まで出かけたほどでした。江戸や京・大坂といった都市部には卓袱料理屋が開店していましたが、やはり卓袱料理の本場長崎は別格の存在だったようです。



▲「長崎丸山において清客卓子料理を催す図」『料理通』より抜粋
(人間文化研究機構国文学研究資料館蔵 CC BY-SA)



卓袱料理

へえ〜、あの有名な
八百膳のご主人が、
卓袱料理を学びに
わざわざ長崎にまで
行ってたなんて驚きだ！



ファッション

僧服

黄檗僧の袈裟や法衣は、他の宗派のものとは異なり、当時の人の目にはとてもカッコ良く見えていたようです。そのため、臨済宗だけでなく曹洞宗という他宗派の僧や歌舞伎衣装までもが、黄檗僧の衣を真似しました。

黄檗僧の影響の大きさに驚いた幕府は、寛文13年(1673)に、黄檗僧の江戸市中徘徊の禁令を出したほどでした。

「祖師源流図(部分)」山本若麟 興福寺蔵▶



歌舞伎衣装

江戸時代、流行の最先端を行く歌舞伎の世界では、衣装に新しいものを取り入れ、それを見た人々が真似をして新たな流行が広がっていきました。歌舞伎衣装の一つに、四天という衽が無く裾が少し短めで、裾の両脇に切れ目が入った衣装がありますが、これは黄檗僧の衣から影響を受けた新しい衣装でした。

◀四天を身につけた歌舞伎役者／三代目豊国「犬養現八(三代目関三十郎)」早稲田大学演劇博物館所蔵

隠元頭巾

江戸時代、お高祖頭巾が隠元頭巾と呼ばれ流行しました。お高祖*頭巾とは、きものの袖の形をしていて、袖口から顔を出すようになっている頭巾です。江戸時代、お高祖といえば隠元のことだったのでしょう。

※高祖：一宗一派を開いた僧

隠元頭巾とよばれるお高祖頭巾(袖頭巾)(画像提供：風俗博物館)▶



宗教

黄檗式の梵唄*、お経を唱えるときに使用する鳴り物(木魚・引磬・銅磬・小鼓・大鑊鉞・銅鑼鼓)などは独特で、多くの僧侶や人々の注目を集めました。中には、他宗派であるにもかかわらず唐音でお経を唱えたり、戒名を黄檗風に変えたりする僧侶もあらわれました。今日仏教で広く使われる木魚は、黄檗宗が伝えたといわれています。

※梵唄：梵語や唐韻による経文などに節を付けて唱えること



▲木魚と引磬「黄檗清規」京都 萬福寺蔵



▲銅鑼鼓と大鑊鉞「黄檗清規」京都 萬福寺蔵

建築

長崎の唐寺や宇治の萬福寺は、伽藍*配置や建築が明代の中国寺院をお手本に独特の建築様式で作られました。その特徴は、赤く塗られた堂宇*や、桃・蝙蝠の意匠、黄檗天井(蛇腹天井)と呼ばれるアーチ型の天井構造、門と本堂の中心軸がずらされた伽藍配置といった点です。この独特の建築様式は、日本の中に異国情緒をたたえる新しい風景をつくりだしました。

※伽藍：寺院にあるお堂や塔、門などの建築物の集まり ※堂宇：お堂あるいはお堂の軒のき



▲黄檗天井



▲「崇福寺建造物配置図」『長崎県建造物復元記録図報告書』より 門と本堂の中心軸がずらされている

絵画

黄檗宗の渡来にともない、長崎や京都を中心に新しい絵画様式が誕生しました。「黄檗画派」には余技的な水墨画と、喜多宗雲・喜多元規らの専門の絵師が描いた写実的で強く鮮やかな色彩の黄檗画像に大別されます。日本文人画の大成者・池大雅、多才の文人・木村兼葭堂、奇想の画家・伊藤若冲など様々な画人も黄檗画派の影響を受けました。



▲「白衣大士観瀑図」逸然性融
長崎歴史文化博物館蔵



▲「獨立禅師画像」喜多元規筆・独立性易賛
長崎歴史文化博物館蔵

彫刻

沈滞していた江戸時代の彫刻に新風を吹き込んだのは、黄檗寺院の仏像制作に腕を振るった中国人仏師たちでした。中でも范道生(1635～1670)は代表的な仏師で、長崎の唐寺だけでなく、隠元の要望で宇治の萬福寺でも腕をふるいました。黄檗様と呼ばれる、明様式にもとづいた装飾的な衣を身に着け、異国的な魅力を放つ仏像は、当時の日本人仏師に影響を与え、黄檗寺院以外でも見られるようになりました。

◀「韋駄天立像」范道生 東明山興福寺蔵



書

隠元をはじめとする黄檗宗の僧侶たちは、多くの個性的な書を残しました。中国からもたらされたこの力強く筆勢にあふれた新しい書法は、唐様の書と呼ばれ、儒者や僧侶、文人だけでなく庶民にまで広く流行します。隠元・木庵*・即非*は「黄檗の三筆」と称され、特に人気がありました。

今でも唐寺を訪れると、禅僧による大らかで力強い書をもとに作られた扁額や聯や門や堂宇で見ることができます。

※木庵：師匠である隠元に招かれ1655年に渡来した黄檗僧。福濟寺の住持となり、後に隠元の後を継いで宇治萬福寺第2代住持となる。

※即非：師匠である隠元に招かれ1657年に渡来した黄檗僧。崇福寺の住持となり、中興開山の祖とされる。後に小倉城主小笠原忠真の要請により福聚寺を開山。



▲左から隠元「慧日耀禅林」 木庵「掌中握日月」 即非「一行書」
いずれも長崎歴史文化博物館蔵



◀伝独立所用印
岩国徴古館所蔵

篆刻

篆刻とは、木や石・金などに印を彫ること。日本では、古くから中国の影響で印が用いられていましたが、江戸時代に入り、隠元の下で出家した黄檗僧の独立性易(1596～1672)が、中国明朝の上品な篆刻を伝えたことにより、日本の篆刻に変革をもたらしました。同じく中国から渡来し、詩や書、篆刻を伝えた僧心越(1639～1695)とともに、「日本の篆刻の祖」と呼ばれています。

伝独立所用印 印影▶
岩国徴古館所蔵



③就老庵

①東笑吟

④遺世独立

②(表)天外一聞人

(裏)遺世独立

文学

江戸時代には、隠元の渡来をきっかけとして詩偈が注目され、『本朝高僧詩選』や『和漢高僧詩偈抄』が刊行されるなど、僧詩ブームが巻き起こるほどでした。禅宗では、悟りの境地は言葉によって説明することはできず、師と弟子の間で心から心へ伝えられると考えられていますが、その一方で、隠元をはじめとする黄檗僧たちは多くの詩や偈を残し、それらは言葉を用いて伝える重要性を示しました。特に、隠元の豊かな感性が反映された詩偈には、審美性や高い文芸性が見られ、江戸時代の文学史において特筆すべき事柄であると考えられています。



▲隠元が編纂した詩集『三頼集』1660年
さんらいしゅう
 国立国会図書館デジタルコレクション



▲隠元の詩偈集『黄檗隠元禅師雲湧集』
 隠元隆琦著・虚白性願編
 国立国会図書館デジタルコレクション

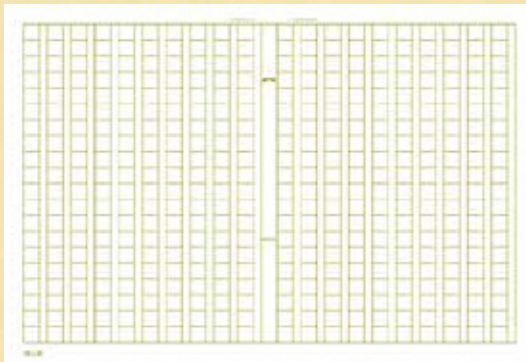
文化



▲見開きで20字20行となり、中央に枠がある形式
 『隠元禅師語録』国立公文書館蔵

原稿用紙

現在使用されている原稿用紙は、1枚が20字×20行の400字詰め、紙の中央に題名などを書き込む枠がある規格になっています。これは、鉄眼一切経（黄檗版大蔵経）をはじめ、『隠元禅師語録』『黄檗和尚太和集』など、黄檗版と称される黄檗宗独自の版木彫刻の様式がお手本となったものです。



原稿用紙▶

明朝体

明朝体は、新聞や書籍、雑誌など私たちの身の回りで最も普通に用いられている書体です。縦の画は太く、横の画が細いのが特徴です。もともと中国宋時代に使い始められましたが、日本へは明時代の書物として多く伝わったことから明朝体と呼ばれます。隠元の語録や年譜なども全て明朝体で印刷されました。

明朝体の文字『隠元禅師語録（部分拡大）』国立公文書館蔵▶



印刷

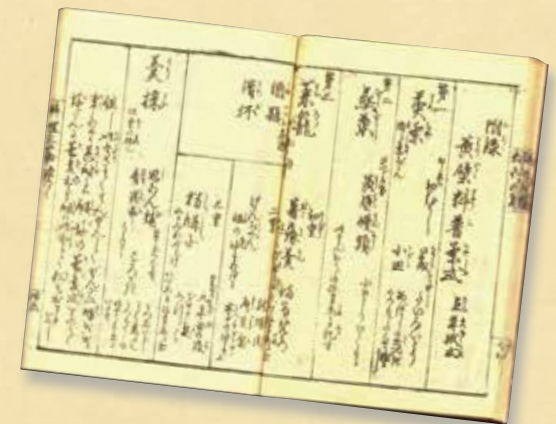
日本国内に仏教経典の集大成である一切経の版木が無いことを残念に思い、版木の製作を志していた鉄眼は、寛文9年(1669)、隠元より明朝版大蔵経を贈られ、版木の作成を開始しました。初版は延宝6年(1678)に完成し、鉄眼一切経または黄檗版大蔵経と呼ばれています。6万枚にもものぼる版木を保管し印刷する場所として建立された萬福寺塔頭・宝蔵院では、今なお大蔵経の木版印刷が行なわれ全国の仏教寺院に提供されています。



▲宝蔵院での木版印刷の様子。
 鉄眼一切経の版木は重要文化財。

新しいものに「隠元」や「黄檗」とつける

「インゲン豆」や「隠元頭巾」、「隠元帽子」、「隠元やかん」、「隠元ふとん」、「隠元豆腐」、あるいは「黄檗料理」、「黄檗いり出」、「黄檗もち」など、目新しいものに、「隠元」を付けて「隠元〇〇」や、「黄檗」を付けて「黄檗〇〇」と呼ぶ事が流行りました。



▲黄檗料普茶式の項に「黄檗饅頭」の字が見える。『料理早指南』より抜粋
 (人間文化研究機構国文学研究資料館蔵 CC BY-SA)



もしも長崎が、隠元や黄檗文化の請来に積極的に取り組まなかったら、今日の豊かで多様な日本文化はありえなかったのかもしれないね。

4 隠元ゆかりの地マップ

隠元禅師 年表

西 暦	隠元禅師の生涯及び関係する出来事
1592年	隠元、福建省に生まれる。
1592~3年	文禄・慶長の役を遠因として明が弱体化
1603年	江戸幕府成立
1620年	隠元(28歳)、出家 長崎最初の唐寺、東明山興福寺開創。(諸説あり) 唐寺の福濟寺(1628年開創)、崇福寺(1629年開創)、と合わせて長崎三福寺と呼ばれる。
1634年	興福寺2代住持(1635年就任)の黙子、中島川にかかるめがね橋を架設。
1637年	隠元、黄檗山萬福寺(福建省)の住持となる。
1639年	鎖国体制完成
1642年	『隠元禅師語録』出版。大ヒット。以後生涯にわたって逐次続編が出される。
1646年	明朝滅亡。清朝、北京に都をうつす。
1648年	隠元、龍泉寺(福建省)の住持となる。 隠元の弟子・也懶の友人である唐僧の無心が日本に渡来
1649年	隠元、再び萬福寺(福建省)の住持となる。
1652~3年	興福寺3代住職・逸然をはじめとする長崎の唐人社会が、隠元に度重ねて渡来を招請
1654年	隠元(63歳)、四度目の招請でついに隠元中国を發ち、鄭成功が仕立てたといわれる船に乗って長崎に上陸 興福寺や崇福寺で多くの言葉をのこす。今は『普照国師語録』中に伝わる。
1655年	隠元、慈雲山普門寺(大阪府高槻市)に入る。
1658年	隠元(67歳)、4代將軍・徳川家綱と面会。
1661年	隠元(70歳)、黄檗山萬福寺(京都府宇治市)を開創。
1673年	隠元、後水尾法皇より大光普照国師号を授かる。 隠元、82年の生涯を終える。

東渡時の経路

順治11年(1654)5月10日、萬福寺で辞衆上堂。出發
↓
5月10日夜、資福寺泊
↓
鳳山永福寺、5日間滞在
↓
5月20日、泉州で木庵に迎えられ、開元寺に数日滞在
↓
6月3日、廈門着。仙巖に滞在
↓
6月21日、木庵と別れ、乗船、出帆(7月5日、長崎入港)

中国

商売のため出かけたまま行方不明となった父を探す旅、出家の旅、修行の旅などで主に福建省、浙江省の各地を訪問。



順治2年(1645)3月22日、晋山。

海口瑞峰寺、獅子巖、竜鳳寺、福盧寺、靈巖寺、西山寺、福善堂など

資福寺、鳳山永福寺

承天寺、羅山棲隱寺、開元寺、延福寺、圭峰報親寺など

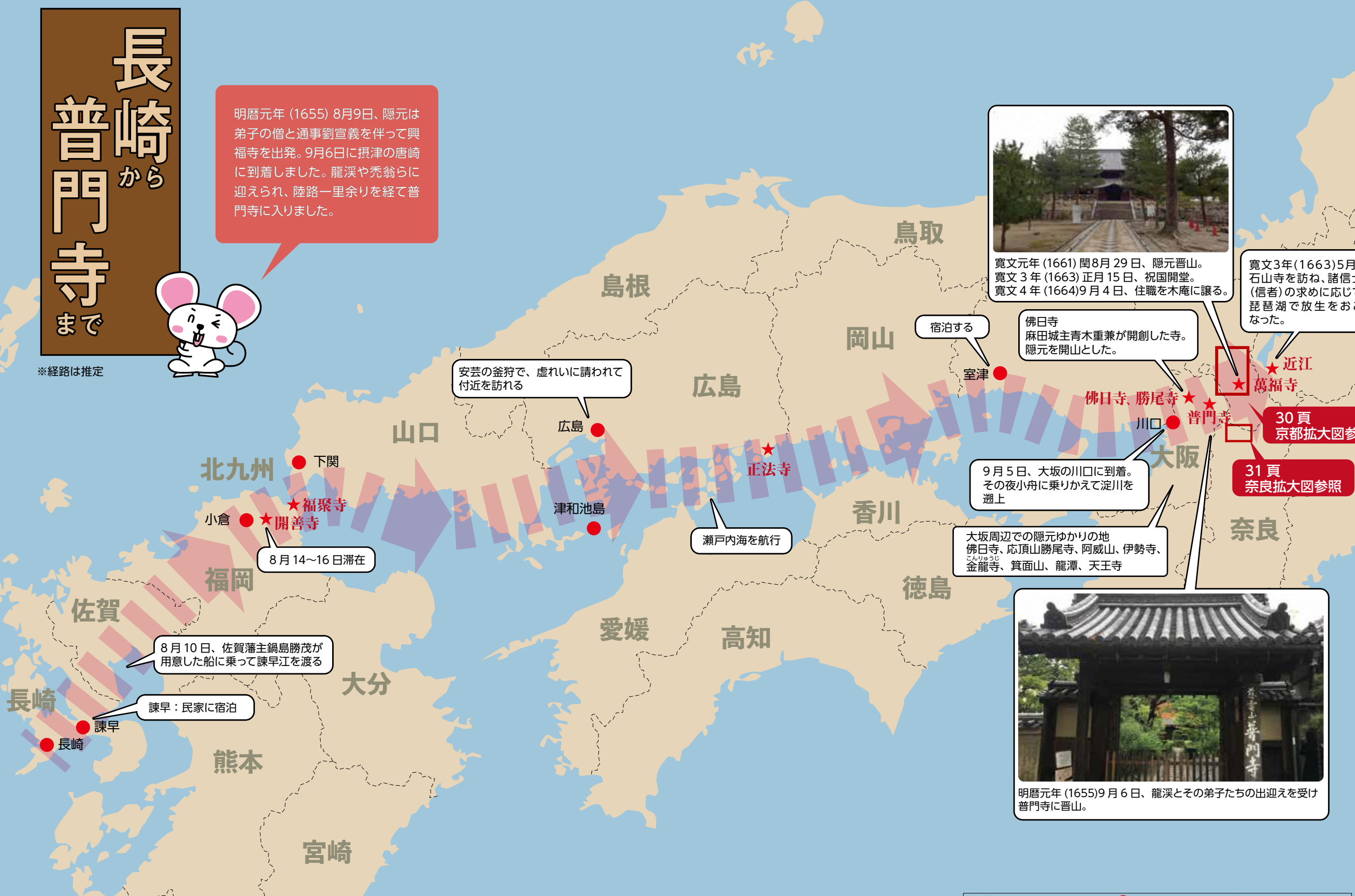
隠元ゆかりの寺

長崎から 普門寺まで

明暦元年(1655)8月9日、隠元は弟子の僧と通事劉宣義を伴って興福寺を出発。9月6日に摂津の唐崎に到着しました。龍溪や禿翁らに迎えられ、陸路一里余りを経て普門寺に入りました。



※経路は推定



寛文元年(1661)閏8月29日、隠元晋山。
寛文3年(1663)正月15日、祝国開堂。
寛文4年(1664)9月4日、住職を木庵に譲る。

寛文3年(1663)5月、石山寺を訪ね、諸信士(信者)の求めに応じて琵琶湖で放生をおこなった。

佛日寺
麻田城主青木重兼が開創した寺。
隠元を開山とした。

30頁
京都拡大図参照

31頁
奈良拡大図参照

9月5日、大坂の川口に到着。
その夜小舟に乗りかえて淀川を遡上

大坂周辺での隠元ゆかりの地
佛日寺、応頂山勝尾寺、阿威山、伊勢寺、
金龍寺、箕面山、龍潭、天王寺



明暦元年(1655)9月6日、龍溪とその弟子たちの出迎えを受け普門寺に晋山。

★ 隠元ゆかりの場所 ● 現在の地名 ■■■ 移動経路(推定)



五代将軍徳川家綱と面会する旅では、隠元は万治元年(1658)9月6日に普門寺を出発し、9月18日に江戸の天沢寺に到着した。江戸での滞在を終え、11月28日に天沢寺を出発。12月14日普門寺に帰着した。

普門寺から江戸まで

※経路は推定

諸信士(信者)の求めに応じて船を浮かべ放生をおこなった。

30頁 京都拡大図参照

31頁 奈良拡大図参照



隠元、霊峰を仰ぎ見て感銘を受け、登山の意を覚える。江戸からの帰路、冠雪した富士にさらに感動する。弟子たちは隠元のために萬福寺東方丈の庭に富士山をつくった。

養源寺の開山雲谷宗岫の求めで立ち寄る

岡崎城主水野監物(忠善)の招きで宿泊

老中稲葉正則が開創。正則の求めで本尊釈尊の開眼をおこなった。

万治元年(1658)9月18日から11月28日まで滞在。

酒井忠勝が父の法事のため隠元を招く。隠元は、焼香・説法をおこなった。

4代将軍徳川家綱に面会。

住持独本性源に請われ、同寺の開山となる。

★ 隠元ゆかりの場所 移動経路(推定)

参考文献

大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編『黄檗文化人名辞典』思文閣出版 1998年
 佐藤文子・上島享編『宗教の受容と交流』吉川弘文館 239-274頁 2020年
 田中智誠『中国の食文化と吉祥性—七夕の縁起物『素麺』について』『黄檗文化』第128号 277-279頁 2008年
 長崎県教育委員会編『中国文化と長崎』長崎県教育委員会 1989年
 長崎市編『長崎市史』地誌編仏寺部上・下 長崎市 1923年
 平久保章編著『隠元全集』第1-10巻 開明書院 1979年
 平久保章『隠元』吉川弘文館 1992年(初版1962年)
 宮田安『唐通事家系論攷』長崎文献社 1979年
 森田登代子『歌舞伎衣装に見られる歴史的・社会的事象の需要《馬簾つき四天》《小忌衣》《蝦夷錦》《厚司》を事例として』『日本研究』40 129-158頁 2009年

究める・つなげる「長崎の歴史」魅力発信事業 **長崎を学ぶウェブサイト**

**長崎県歴史・文化ポータルサイト
ながさき歴史・文化ネット**

長崎県内のミュージアム(美術館、博物館、動植物園、水族館など)・文化ホールを施設分類やエリア、分野で検索する事ができ、各施設の基本情報のほか、展覧会や講演会などのイベント情報も見ることが出来ます。県内ミュージアムの見学やイベントをお調べの際にご活用ください。あわせて、各施設の専門家などによるコラムや、本情報誌など読み物もたくさん掲出しています。



**無料アプリ
ながさきミュージアム**



長崎県文化振興課の公式アプリケーション。長崎県内のミュージアムや文化施設を完全網羅し、開催中のイベント情報や施設情報を確認できます。

App StoreまたはGoogle playで



旅する長崎学 TABINAGA

長崎県の歴史・文化をわかりやすく楽しく学び、歴史の旅に出かけたいような「歴史の旅と遊学サイト」。「長崎Web学会」など最新の情報を随時掲載。



長崎県のふるさと納税関連事業のご紹介

ふるさと納税制度を活用して長崎県の事業を支援することができます。関連事業をご紹介します。みなさまの寄附のご協力をよろしくお願いいたします。寄附の方法等は長崎県税務課HPをご参照ください。

<https://www.pref.nagasaki.jp/section/zeimu/>

「長崎県の特徴ある歴史・文化芸術を活用した地方創生プロジェクト」

本県の特徴ある歴史・文化芸術を活用し、まちづくりの推進や人材育成を目的に、地域の皆様と協働で「長崎しまの国際芸術祭」を開催しております。音楽やアート活動は「ながさき愛」を高めるきっかけとなりますので、応援をよろしくお願いいたします。



表紙

- ・「隠元騎獅像」喜多道矩筆・隠元隆琦賛 長崎歴史文化博物館蔵
- ・「初登宝地」東明山興福寺
- ・崇福寺第一峰門
- ・「布袋像」聖福寺
- ・普茶料理(聖福寺)
- ・「染付急須」龜山焼・木下逸雲絵付 長崎歴史文化博物館蔵

©令和3年(2021)3月発行
 ©企画・発行:長崎県文化観光国際部文化振興課